井上靖「赤い実」（「しろばんば」後編）授業試案

――中学生の共感を高めるために――

高木伸幸

はじめに

昭和三十五年一月から三十七年十二月にかけて『主婦の友』に連載された井上靖の自伝的長編小説「しろばんば」は、今日なお中学生の読書感想文課題図書として、しばしば取り上げられている(1)。中でも後編四章の一部については「赤い実」と題され、光村図書発行の中学一年生用国語教科書（『国語一』）に、昭和五十六年度から平成四年度まで掲載された。「赤い実」はもちろん、その出典である「しろばんば」全体についても、国語教材として貴重な役割を果たしてきた文学作品と言える。

しかし初出から五十年以上経過した「しろばんば」は、後述するような理由もあって、現代の中学生にとって、必ずしも親しみやすい小説とは言えないようだ(2)。「赤い実」の教科書掲載が既に終了しているのも、そのような経緯があってのことと思われる。

とは言え、「赤い実」そして「しろばんば」には、中学生に読ませるべき普遍的なモチーフが確かに表されている。指導法によっては、現代の中学生にも、大きな共感をもって読ませることは、決して不可能であるまい。

本稿は「赤い実」を含めた「しろばんば」後編について、そこに隠されている一つのモチーフを明るみに出した指導法を提案し、国語教材として再生を試みようとするものである。

一

「しろばんば」は、前編では小学二・三年生、後編では五・

六年生となる洪作少年を主人公とし、戸籍上の祖母（実際は曾祖父の妾）おぬい婆さんと、洪作との互いを思いやった日々の生活が物語の主軸として描かれている。加えて前編では同僚教員と恋愛し夭折する美しい叔母さき子を慕う洪作の思いが、後編では都会から転入してきた御料局長の娘あき子への洪作の淡い気持ちが、それぞれ表されている。

「赤い実」は、この「しろばんば」後編の一部を採ったものである。一月十四日「どんどん焼き」の出来事と、それから間もない「ひよどりのわな」にまつわる事件によって構成されている。「どんどん焼き」の場面では、あき子の書き初めの文字「少年老い易く学成り難し」を目にした洪作が、あき子へ「尊敬の思い」を抱く。「ひよどりのわな」の場面では、小鳥を捕ることについてあき子から激しく泣き出すという形で抗議され、洪作は自分が残酷さに鈍感であったと気付く。同時にそのようなあき子に反発も感ずる。しかも、ともにわなを仕掛けた幸夫が、「ひよどりの死体」を放り投げるやり方であき子の抗議に「対処」したのに対して、何もできなかった自分の意気地なさも痛感する。洪作はあき子から、幸夫から、ともに「自己倦厭の感情」を抱かされたのである。

「しろばんば」は、ほぼ全編を通して、主人公洪作の視点から物語が進められており、少年期の多感な感性、心情の変化の表現において優れた小説と言える。中でも「赤い実」の部分では、「しろばんば」後編の一つの主要モチーフである、洪作のあき子へ向けた淡い気持ちが前面に押し出されている。思春期の入り口における異性思慕、その気持ちの移ろいが細やかに表現されているのである。加えて「ひよどりのわな」事件においては、幸夫の「対処」を目にした洪作の心情、すなわち同性の友人と対比した自己倦厭までもが表されている。友人・同級生に対する少年の心のあり方が、ここでは異性・同性の両面から捉えられているのである。

光村図書『国語一』では、「赤い実」本文の後に置かれた「学習のしおり」にて、「人物の心情の変化を読み取る」ことが〈めあて〉として挙げられている(3)。「赤い実」は、そして「しろばんば」は、この〈めあて〉に取り組ませる上で、まさに恰好の国語教材と言えよう。教員の立場から見て、中学生にぜひ読ませたい文学作品であることは、今なおその通りである。

しかし、この「赤い実」「しろばんば」は、現代の中学生の立場から見ると、必ずしも親しみやすい国語教材、小説とは言えないようだ。「しろばんば」は今でも読書感想文にしばしば取り上げられているものの、それを自主的に読むに至った生徒となると、必ずしも多くなく、以前に比すれば減少しつつあるようにさえ思われる。

一つの理由として、「しろばんば」が単行本で六〇〇ページ

近い長編である上に、その物語が洪作の日常的なエピソードの積み重ねで成り立っていることが挙げられよう。いわば淡々と進行し、しかもかなり量がある「しろばんば」の物語は、刺激の強いライトノベルやテレビドラマに慣れた現代の中学生にとっては、単調で退屈に感じられてしまうのである。

しかし、このことは、逆に言えば、「しろばんば」が、中学生の嗜好に安易に合わせて作られているのではないこと、本格的な文学への入門というべき位置にあることを意味する。淡々とした「しろばんば」の物語は、場面ごとに詩に親しむように読み取ってこそ初めて味わいは深まる。読書好きでない中学生にとって、決して読みやすい小説でないものの、文学鑑賞のあり方を中学生に教授するために、だからこそ「しろばんば」は重要と言える。その一見単調な物語展開は、国語教材としてむしろ大切な要素であろう。

いま一つの理由として挙げられるのは、「しろばんば」の時代・舞台設定である。伊豆の山村、湯ヶ島が主な舞台であり、前編は「大正四、五年」頃で、後編はその三年後、大正七、八年頃として描かれている。初出から五十年以上経過した所為もあって、この「しろばんば」の時代設定は、もはや百年近い昔となっており、その舞台についても、都市化が進む現代にあって、誰もが日常的な感覚をもって捉え得る世界ではなくなりつつあろう。

実際、「赤い実」における最初のエピソード「どんどん焼き」は、現在都市部で殆ど見かけられなくなっている。「どんどん焼き」を体験したことのある中学生はごく一部に限られよう。まして「小鳥をとるわな」を仕掛けたことのある中学生となれば、さらに少なく、おそらく皆無に等しいであろう。

つまり「赤い実」を含めた「しろばんば」は、その時代と舞台の設定が、現代の中学生には、もはや共感されにくくなっているのである。「しろばんば」が、現代の中学生から、自主的な形ではあまり読まれなくなってきた本質的な要因は、おそらくここにあり、「赤い実」の教科書掲載が終了したのも、このことが少なからず関わっていよう。

このような中学生には親しみにくい側面について、例えば「赤い実」の場合、生徒それぞれに正月の思い出や体験した行事を語らせて、「どんどん焼き」に対する理解をある程度深めさせることはできよう。あるいはカブトムシの採集やオウム・セキセイインコ等の飼育、それらを飼育中に死なせてしまった体験などを生徒たちに語らせ、「ひよどりのわな」事件への共感を幾分か高めさせることもできよう。

しかし、こういった指導法では、「どんどん焼き」にしても、「ひよどりのわな」にしても、生徒たちは、あくまで〈知識〉として理解できる範囲にとどまる。「赤い実」「しろばんば」を通して、失われつつある日本の伝統文化・行事について知

識を得させていくのも確かに重要であるが、そのようないわば〈古典〉としての捉え方でなく、現代の中学生にもっと大きな共感をもって読ませる指導法はないものだろうか。先に見たごとく、「しろばんば」の主要モチーフ自体は、むしろ普遍性を持つ。ならば指導法次第で、まだまだ中学生の共感を集められる国語教材のはずである。

分厚い『しろばんば』一冊をいきなり通読させるのは、読書嫌いを増長させる危険も予想され、避けるのが賢明であろう。「赤い実」の授業を切り口としながら、その中で中学生の興味を引き出していく工夫が必要と言える。

そこで「赤い実」の「どんどん焼き」の場面に隠された時代背景に注目したい。そこから「しろばんば」の特に後編へと読みを拡げていくことで、現代の中学生にこそ共感され得る一つのモチーフが見えてくるのである。

二

「赤い実」の「どんどん焼き」の場面を改めて確かめてみたい。あき子の書き初めの文字を目にした洪作の心情が次のように記されている。

洪作は身内の引き締まるような緊張を感じた。ああ、少年老い易く学成り難し。洪作はいきなり立ち上がって、土蔵へ帰り、二階へ上がって勉強をしたいような気持ちにさえなった。洪作は、自分の書き初めを火の中へ突っこんでいる少女を、尊敬の思いで眺めた。今まであき子にひかれたことはあったが、しかし、今のひかれ方は全く違っていた。自分にこのような感動を与える文章を書き初めに書いた少女への賛嘆であり、賛美であった。

洪作は、あき子の勉強に対する姿勢、意識の高さを書き初めの文字から感じ取り、あき子へ「尊敬の思い」を抱いた。そこまでは容易に把握できる。それでは何故、洪作はこれほどまで敏感に反応したのであろうか。そこまで踏み込む必要があろう。洪作が勉強熱心だと捉えるだけでは表層的である。

手掛かりとなるのは、あき子が小学六年生、洪作が五年生という二人の学年であり、しかもそれらは決して現在と同じでないことに注意されたい。物語の背景にありながら、現代の中学生には理解し難い、当時の学校制度を把握して捉えねばならない。

物語の時代である大正七、八年当時、義務教育は小学校六年間のみで、その後はそのまま就職するか高等小学校二年間を経て就職する者が大半であった。経済的に余裕があって、かつ学力優秀な者のみが、男子の場合は中学校（五年制）へ、

女子の場合は高等女学校（四年または五年制）へ進学できた。
つまり当時の小学六年生は、重要な進路の選択期、いわば受験学年に該当し、五年生はその立場を一年後に控えていたのである。しかも六年生にとって、正月は入学試験本番が間近に迫った時期であり、だからこそあき子は書き初めの文字に「少年老い易く学成り難し」を選んだのである。洪作は五年生として、翌年の自分を見るごとき思いもあって、あき子の書き初めの文字が強く胸に響いたのである。
このことを踏まえて「赤い実」を捉え直すと、洪作のあき子へ向けた心情がいま少し違った角度をもって見えてくるであろう。右の引用にも「今まであき子にひかれたことはあったが、しかし、今のひかれ方は全く違っていた」とあるように、それは確かに異性思慕であっても、その範囲だけに収まらない。受験勉強の先達であり、同志として相手を見つめ敬う気持ちがそこには含まれているのである。「ひよどりのわな」事件に際しても、異性としての淡い気持ちはもちろんであるが、同じ受験予定者としての敬意を持つ相手であるからこそ、あき子の抗議に洪作は大きなショックを受けたと読むことも可能なのである。
「赤い実」の、特に「どんどん焼き」の場面には、その背景に当時の学校、受験のシステムが潜んでいる。あき子が登場する「しろばんば」後編全体に目を向ければ、そのことはより一層よくわかる。
「しろばんば」後編一章の冒頭近くにて、御料局長の娘として、九月に都会より転入してきたばかりのあき子から、洪作は次のように話しかけられている。

「洪ちゃ、勉強してるんですって？」
近づいて来ると、あき子は言った。あき子に声をかけられることは予想していなかったので、洪作はすっかりどぎまぎした。
（中略）
「私は来年よ、洪ちゃはまだ再来年でしょう」
あき子が入学試験のことを言っているのは明らかだった。

湯ヶ島の小学校の中で、あき子はその学年でただ一人、女学校の受験予定者であり、洪作は次学年でこれもただ一人、中学校の受験を予定していた。進学者の少ない山村の小学校において、周囲から注目されやすい上級学校進学予定者として、あき子と洪作は出会ったのである。あき子と洪作はこれ以降、当然勉強面において互いに多く関わりを持っていくようになる。
例えばあき子の転入から約二カ月後の十一月、「田方郡の

各学校から作文のうまいのを一つ選んで郡の方へ出すことにな」り、男子生徒では洪作が、女子生徒ではあき子が作文を書くように言い渡された。この時「洪作は選抜を受けたことも嬉しかったが、所長さんの家のあき子と一緒に書くということは、それだけで心の躍る悦びがあった」。洪作は受持教師から「書く題材が一緒になるといけないから、二人で一応相談してから書きなさい。でき上った上でいい方を出すことにする」と言われ、あき子へ「何を書く」か相談を持ちかける。するとあき子から、「秘密よ。ずるいわ、洪ちゃって」「洪ちゃって、嫌いよ、ずるいから」との誤解された返答を受けてしまう。以来「洪作はあき子と道で会っても、学校の運動場で顔を合せても、ひと言も喋らなかった」「あき子の方はあき子の方で、やはり同じような敵意を洪作に抱いているらしく、洪作の顔には決して視線を当てなかった」。

あき子による洪作への誤解は、あき子が洪作を勉強面でのライバルと捉えていたことに大きな原因があろう。あき子は洪作に負けたくなかったのである。一方、洪作は、このようなあき子の態度から、それまでの淡い異性思慕に加えて、やはり勉強面での対抗心を持つようになったであろう。同じ上級学校受験予定者であるあき子と洪作は、学年一つ違っても、必然的に勉強面におけるライバル関係となったのである。「赤い実」に描かれた「どんどん焼き」と「ひよどりのわな」の場面は、この作文事件から約二カ月後にあたる。

さらに「赤い実」の二つの場面を挟んで間もなく、洪作は伯父でもあり、小学校長である石守森之進から呼び出しを受ける。

「沼津へでも行って参考書を買って来なさい。教科書だけやっているようでは、とてもはいれん！　とにかく、もっともっと勉強せい」

石守校長は言った。勉強せい！　の一点張りであった。これはあとで洪作が知ったことであるが、この学校からのただ一人の今年の受験生であったあき子が、沼津の女学校を受験して、僅かの落第生の中にはいってしまったことが、この日判明したのであった。それで石守校長はすっかり不機嫌になり、来年の受験生である洪作にまで、当り散らしたのであった。

あき子の受験結果は、洪作にも大きな影響を及ぼしたのである。実際にそれから一年間、洪作は受験勉強に取り組む。「毎晩受験準備のため、渓合の温泉旅館の一つに下宿している犬飼という教師のもとに」行き、勉強が捗った一方で、犬飼の神経衰弱に振り回されるなどのエピソードもあった。そして中学校の入学試験に備えて、洪作が湯ヶ島の小学校を離

れ、浜松に向かうところで「しろばんば」の物語は幕を閉じる。

結末の少し前、湯ヶ島を発つ直前の場面で、高等科に在籍して再受験を目指していたあき子から、洪作は久しぶりに話しかけられている。

「中学校へはいったら手紙を下さいね。わたしは、多分東京の女学校へ行くようになると思うわ」

そんなことを言った。

（中略）

あき子は入学試験のことばかり話した。そして、二言目には、

「確り勉強するのよ、町の子供に敗けてはだめよ。確り、確り」

そんな言い方をした。洪作は黙って頷いていた。

右にも明らかなように、「しろばんば」後編には、主人公洪作とヒロインあき子による〈受験生の物語〉という側面が色濃く認められる。中でも「赤い実」は、そのモチーフが、「どんどん焼き」の場面において象徴的に表れているのである。そして「赤い実」並びに「しろばんば」後編について、このような〈受験生の物語〉という側面に注目させることこそが、現代の中学生に大きな共感をもって読解させる有力な方法と言い得るのである。

現在義務教育は、小学校、中学校の計九年間に延長され、さらに入学試験を経て高校へ進学する生徒の数は一〇〇％に近い。今や受験生という立場は、中学生の大部分が経験する。しかも、国立・私立の中学校へ、入学試験を経て入学する生徒数が年々増加傾向にある。文部（科学）省の「学校基本調査」によれば、「赤い実」が初めて『国語一』に掲載された昭和五十六年度では、国立・私立中学校への進学率は全体の三・五％に過ぎなかった(4)。それが平成二十七年度においては、七・九％と倍以上に増加しており、同年度の東京都に限って言えば、二四・八％とおよそ四人に一人が国立・私立中学に進んでいるのである(5)。

すなわち「赤い実」を含めた「しろばんば」後編の世界は、受験生の立場を小学生時代に経験済みである国立・私立中学校の生徒にとって何より身近であり、公立中学校の生徒の場合も、進路選択を控えた三年生には、共感できるところが大きいと言える。これまで中学校一年生用の国語教材として用いられてきた「赤い実」であるが、公立中学校においては三年生の授業で取り上げ、国立・私立中学校では従来通り一年生の国語教材として扱い、ともに「しろばんば」後編へと読みを拡げていく指導法を提案したい。

もちろん「しろばんば」は、ただなる受験生の物語でない。このような読ませ方は小説の一面にこだわり過ぎの嫌いもある。しかし中学生の共感を高めさせることは、「しろばんば」全編へ、さらには文学そのものへ、彼らの興味を拡げ導いていく効果が期待できよう。

以下、指導案の略案を記す。

一、教材名

・井上靖「赤い実」（光村図書『国語一』昭和五十六年度～平成四年度）

・井上靖『しろばんば』後編（新潮文庫）

二、授業の目標

登場人物の心情変化を表現上の工夫と併せて読み味わい、読解力・語感を向上させるとともに、文学作品への興味・関心を高める。

三、教材観・授業対象

本稿の本文参照。

四、授業の時期

「六、指導計画」の「第五時（発展編）」として挙げた課題へ取り組ませる上で、長期休暇を間に挟む「七月から九月」または「十二月から一月」が適切。特に後者は正月間近な十二月に「赤い実」を学ぶことになり、「どんどん焼き」（正月行事）の理解を深めるためにも相応しい時期である。

五、授業の評価規準

ア、国語への関心・意欲・態度

・「赤い実」「しろばんば」後編を意欲的に読み、文学作品への興味、感心を高めている。

・「赤い実」「しろばんば」後編の世界を自身の問題に引きつけ、共感をもって読むことができる。

イ、読む能力・書く能力

・登場人物の立場や心情の変化を的確に読み取り、味わうことができる。

・読み取った登場人物の心情について、自身の問題と較べ、自分の意見を持って感想文を書くことができる。

ウ、言語についての知識・理解・技能

細やかな表現上の違いに気づき、それぞれ表現効果を把握し読み味わい、語感を高めている。

六、指導計画（七時間）

第一時

◎全文通読

ア、物語の概要をつかむ。

イ、漢字、難語句を調べ、理解する。

第二時（本時）

◎「どんどん焼き」場面読解

ア、正月行事「どんどん焼き」を知る。正月伝統行事について理解を深める。
イ、洪作はあき子の書き初めの文字「少年老い易く学り難し」を見て、何故「尊敬の思い」を抱いたのか。背景にある当時の学校制度を手掛かりに考察し、同じ受験予定者の立場にある洪作とあき子の心情を理解する。

第三時

◎「ひよどりのわな」場面読解
ア、「ひよどりのわな」を通して、自然体験へ理解を深める。
イ、「あき子の非難と抗議」に対する洪作と幸夫の心情の変化を読み取る。
ウ、あき子と幸夫に対する洪作の「自己倦厭の感情」について考える。特に前者は前時で学んだ二人の関係を踏まえながら、後者は同性の友人であることを考慮しながら、それぞれ理解を深める。

第四時

◎「赤い実」の表現上の工夫を押さえる。
・細やかな表現の違い、それらの効果について理解する。

第五時（発展編）

◎「赤い実」の発展として、「しろばんば」後編全体を読む。
＊本時の内容は夏季（冬季）休暇の課題として各自で取り組む。感想文は第七時で行い、ここでは書かなくてよい。
＊前編を読むか否かは自由。前編については「あらすじ」を与えておく。

第六時（発展編）

◎「しろばんば」後編読解・「赤い実」再読
ア、「しろばんば」後編に、あき子と洪作による〈受験生の物語〉という側面があることを理解する。
イ、「赤い実」「どんどん焼き」の場面以前の洪作とあき子の関係を踏まえ、洪作のあき子への「尊敬の思い」がどのように見えるか、改めて確認し考察する。
ウ、「赤い実」「どんどん焼き」の場面から、「しろばんば」後編へ読みを拡げることで、小説の一場面は、その奥に様々な物語が存在していることを理解する。
エ、その他、「赤い実」「しろばんば」後編から何が読み取れたか、意見交換する。

第七時（発展編・全体まとめ）

◎「赤い実」を含めた「しろばんば」後編の感想文を書く。
・授業を踏まえつつ、自分の意見と併せて感想文を書く。

七、本時の指導

ア、本時の目標
・「どんどん焼き」を通して、正月の伝統行事について理解を深める。
・洪作はあき子の書き初めの文字「少年老い易く学り難し」

を見て、何故「尊敬の思い」を抱いたのか。当時の学校制度を手掛かりに考察し、同じ受験予定者の立場にある洪作とあき子の心情を理解する。

イ、本時の評価

・正月の伝統行事について詳しく知り、その知識を参考にしながら、「どんどん焼き」を描いた本文を読み味わうことができる。

・洪作のあき子への「尊敬の思い」について、当時の学校制度を手掛かりに的確に把握できるとともに、あき子と洪作の心情を自身の問題と比べつつ読み味わうことができる。

ウ、本時の展開

	学習活動	指導上の留意点
導　入（5分）	①物語のあらすじを確認し、「どんどん焼き」と「ひよどりのわな」の二つの場面に分けられることを確認する。 ②本時の学習目標を確認する。	・適宜本文に注目させながら、「赤い実」のあらすじを確認させる。 ・本時の学習目標を板書し確認させる。
展開（40分）	③本時の学習範囲（冒頭から「どんどん焼き」の場面終わりまで、「十四日は」～「賛嘆、賛美であった」）を音読する。 ④正月行事「どんどん焼き」を知る。正月行事について理解を深める。 ⑤洪作はあき子の書き初めの文字「少年老い易く学り難し」を見て、何故「尊敬の思い」を抱いたのか考察する。 ⑥あき子の書き初めの言葉はどのように思えるか、短作文（A4用紙一枚）を書かせる。	・なるべく多くの生徒に音読させるため、丸読みの形で行う。 ・「どんどん焼き」の体験者がいれば、それについて話させる。 ・生徒各自の正月行事の思い出を語らせる。 ・まずは自力で考えた意見を出させる。 ・意見が出揃った段階で、あき子が六年生、洪作が五年生であることを確認し、現在と異なる当時の学校制度を教える。あき子・洪作ともに受験生の気持が表れていることに気付かせる。 ・中学三年生（昨年まで受験生だった中学一年生）の立場から見て、どのように思えるか考えて書かせる。 ・作文は次回発表することを伝える。
まとめ（5分）	⑦本時の学習を振り返る。 ⑧次回の学習内容について知る。	・板書事項を確認する。 ・次回の学習範囲を伝達する。

三

右の指導略案の中、第二時「どんどん焼き」場面読解の一部について模擬授業を試みた。平成二十八年九月二十日「別府大学文学部国語科教育法Ⅳ」の講義を利用し、筆者が教師役を担当、受講学生十二名（三年次生十一名、科目等履修生一名）に中学三年生の生徒役を務めてもらった。

第二時「本時の展開」から特に「学習活動⑤⑥」の部分を取り上げ、以下のような手順で進めた(6)。

ア、設問(1)「洪作はあき子の書き初めの文字『少年老い易く学り難し』を見て、何故『尊敬の思い』を抱いたのか、あなたの考えを書け」（A4白紙用紙に作文させる。十五分）

イ、あき子が六年生、洪作が五年生であることを確認させる。大正七、八年当時の学校制度を説明し、あき子は今年、洪作は来年が受験学年であることを押さえさせる。

ウ、設問(2)「『大正時代の六年生・五年生』という立場を踏まえると、洪作のあき子への『尊敬の思い』がどのように思えるか、中学三年生という自分の立場と比べながら、あなたの考えを書け」（A4白紙用紙に作文させる。十五分）

設問(1)および設問(2)とも作文形式で解答させたのは、生徒役の学生がどれだけ深く考察できたか、より正確に把握するためである。

まず設問(1)に対する解答を一部挙げれば、以下のようであった。

- 自分とあまり年の変わらぬあき子が書き初めで難しい漢詩を書いていた。そのことから、あき子の書いた字によって自分も時間を無駄にしてはいけないという気持ちになったのだろう。（C・Aさん）
- むだな時間を過ごしている自分があき子の文字と文章に感動し、勉強したいという気持ちにさせられたからだろう。（K・Kさん）
- 「ひかれたことはあった」「そのほうは見ないでも～だれであるかわかっていた」という点から、元々洪作はあき子に対して特別な感情を抱いていたのかもしれない。（M・Mさん）
- 「少年老い易く学成り難し」という漢詩の意味を知っていた洪作ではあったが、書き初めにするほどではなかった。同年代のあき子が、そのような漢詩の一部分を自信たっぷりの力強い書きぶりで書いていたところに尊敬の思いを抱いたのだと思う。（K・Zさん）

・あき子が「男の子でも書きそうな強い感じの大きな字」を書いていたことで、今までとは違うあき子の一面を洪作は知って、それによって「尊敬」という思いをあき子へ抱いた。異性としてひかれていた洪作が、この書き初めからあき子にあこがれのような感情を抱き、それを尊敬として表現しているものだと思われる。異性としてではなく、あき子の人間性にひかれたことで「尊敬の思い」を洪作は抱いたのではないだろうか。（Y・K君）

次いで設問(2)に対する解答を一部挙げると、次のようであった。

・あき子は迫っている受験をみすえて書き初めを書いているのだと思い、自分は、まだ実感がなく、来年は、あき子のように考えているのだろうかと思ったのだろう。また「少年老い易く学成り難し」という言葉から、あき子の受験に対する真剣さ、焦り、不安などが感じられ、自分も来年のことと思わず、あき子のように自分も今から時間を無駄にせず、勉強に取り組まなければいけないと思わされたのだろう。（C・Aさん）

・あき子は六年生の一月十四日なので受験を間近に控えていて、受かるための勉強はもちろん、精神的にふさぎ込んだり不安を抱えやすい時期であると考える。そんな時期に強い感じの字で書かれていたあき子の書と書の意味を思って洪作は、来年は洪作自身が今のあき子と同じ受験生の立場になると気づき、あき子の書への思いを感じてあき子を尊敬するような思いになったのだろう。（A・Yさん）

・洪作はこの時のあき子に来年の自分の姿を重ねて見ていたのだと思う。漢詩にある初めの一行だけを洪作が理解したのは自身が五年生だったからで、受験を目の前にした六年生の決意を見たことで、あき子に尊敬の思いを抱いたものだと考えられる。（中略）あき子に抱いた尊敬の思いは、自分も来年には今のあき子のようになりたいというあこがれのような感情だったのではないだろうか。（Y・K君）

・六年生のあき子は受験をひかえていて、たくさん勉強している。あき子を見て、洪作は、自分もあき子を追いかけよう、たくさん勉強しようという思いがあり、少しの時間も無駄にせず、勉強しようというあき子を尊敬している。私だったら、勉強が嫌で逃げたくなっているし、上級生や好きな人を尊敬して頑張ろうとは思わないから、洪作のことをすごいと思うし、あき子もすごいと思う。洪作はそれくらいあき子のことを好きだし、離れたくな

いという思いがあるのかなと思った。（K・Sさん）

・大正時代の小学五・六年生は受験生で、中学三年生の自分と同じ立場である。同じ受験生として志高く、学業に励んでいること、合格への思いなどを洪作はあき子に対して感じて、自らもがんばらなければと思ったもので、私も、同じ受験生の立場として、入試に向けて、勉強をがんばらなければと考える。（D・H君）

一読して明らかなように、本文のみで考察した設問(1)の解答と比べて、物語の背景を踏まえた設問(2)の解答が分量も多く、内容の上でも明らかに深まりが見られる。

十五分という短い時間の中で、設問(1)の解答も、「（洪作の）勉強したいという気持ち」（C・Aさん）や、「（あき子の書き初めの）力強い書きぶり」（K・Zさん）「（洪作のあき子に対する）特別な感情」（M・Mさん）など、本文中の重要な表現を一応押さえている。しかし、あくまで言葉を拾った範囲に留まろう。

対して設問(2)の解答では、二人の受験生と言う立場への注目はもちろんであるが、そのことから派生して、「あき子の受験に対する真剣さ、焦り、不安」（C・Aさん）や、「自分も来年には今のあき子のようになりたいという（洪作の）あこがれ」（Y・K君）などに言及し、心情の奥まで読み込もうとする姿勢が表れている。D・H君のように「中学三年生の自分」を洪作・あき子と重ねた解答、K・Sさんのように「勉強が嫌で逃げたくなっている」自分の気持ちを記した解答もあった。今回はあくまでロールプレイングであるものの、生徒役の大学生にとって、自分も経験してきた〈受験生〉という立場は、やはり共感するところが大きいのであろう。

読解にあたって、初めに教材の本文のみで考察させるのは、細かな表現に注目させる訓練として必要である。その上で物語の背景を説明し、改めて読解させることで、生徒は表現の裏側に奥深い世界が存していることを実感できる。

「赤い実」「しろばんば」後編の読解においても、〈受験生の物語〉という背景を知らせることで、生徒の共感は高まり、読みが深まることは十分確認できたと言えよう。

おわりに

国語教材である井上靖「赤い実」、その出典である「しろばんば」は、洪作少年の心情変化という、中学生に読ませるべき貴重なモチーフを表しつつも、大正期の山村という時代・舞台設定において、現代の中学生には親しみにくい側面も強くなっている。しかし、背景にある当時の学校制度を視野に入れることで、受験生の物語という、今日的なモチーフを読

み取らせることも可能となる。

「しろばんば」全編をいきなり読ませるのでなく、「赤い実」の授業のみで終わるのでもない。「どんどん焼き」の場面を切り口として、「しろばんば」後編全体へと読みを拡げていく。その指導法により、一つの場面の奥には身近に思える物語が存していることを実感でき、現代の中学生も大きな共感を持って読み通せるのである。結果として、生徒の関心が、洪作・あき子の関係に留まらず、物語全体を貫く洪作・おぬい婆さんの関係などへも向かい、洪作の心情変化をより深く、多面的に読み解くまでに至れば授業は成功と言えよう。かくて「しろばんば」は、現代の中学生にも親しまれる国語教材として再生されるのである。

注

(1) 例えば筑波大学附属中学校では、毎年中学一年生夏休みの読書課題として、「しろばんば」を与えている。岡田幸一「単元名「わたしの好きな『しろばんば』—伝統的読書教材を教室で読み直す試み—（第一学年）」（『平成二十五年三月『筑波大学附属中学校研究紀要』第六十五号』）参照。

(2) 岡田幸一は注(1)に挙げた論の中で、「しろばんば」を読んだ中学一年生の反応として、「元々読書好きな子たちは『意外に面白かったですよ』と言ってくれる」と記している。つまり現在、「しろばんば」は、読書好きな中学生においても、〈おもしろい作品〉とのイメージを必ずしも抱かれておらず、それ以外の中学生にとっては、どちらかと言えば、親しみにくい小説と見ることができる。

(3) 光村図書発行『国語一』（昭和五十六年二月）に掲載された「赤い実」において、「学習のしおり」は次のように記されている。

人物の心情の変化を読み取る

この作品は、洪作の、あき子に対する気持ちを中心にして書かれている。それは、

「洪作はそのほうは見ないでも、そうさけんだ者がだれであるかわかっていた。」（68ページ）

のように、それとなく表現されている場合もあり、

「自分の書き初めを火の中へ突っこんでいる少女を、尊敬の思いで眺めた。」（69ページ）

のように、直接に表現されている場合もある。このような表現を、次の順に読み取って、洪作の心境の変化を考えてみよう。そして、洪作がどんな自覚をもつようになったかも確かめてみよう。

(1) どんどん焼き以前
(2) どんどん焼きのとき
(3) ひよどり事件のとき
(4) ひよどり事件から何日かたって

表現の細かなところに注意して読み味わう

作品を読み味わうとき、語句の意味や感じのちょっとした違い、互いに関連する語句と語句のひびき合いなど、表現の細かなところを見のがさないようにしよう。

例えば、次の語句は、あき子の同じ行為をいろいろに表現したものである。このような語句が、作品の中で互いにどうひびき合い、人物の様子や心情をどのように表現しているかを読み味わおう。

泣き声・泣く（74ページ5～8行）

嗚咽する　（同9行目）

（あき子の）発作（同13行目）

（あき子の）非難と抗議（75ページ3行目）

（4）文部省の昭和五十六年度「学校基本調査」によると、同年度の全国中学校生徒数は5299282名、うち国立中学校生は35975名、私立中学校生は151453名であった。

（5）文部科学省の平成二十七年度「学校基本調査」によると、同年度の全国中学校生徒数は346521名、うち国立中学校生は31026名、私立中学校生は243390名であった。東京都に限ると、全中学校生徒数は310874名、国立中学校生は2755名、私立中学校生は74357名であった。

（6）生徒役の学生にとって、「赤い実」の授業は今回が初めてであったため、授業の初めに全文音読および「どんどん焼き」の場面黙読に合計二十分間時間を割いた。

＊本文引用について、「赤い実」は光村図書発行『国語一』（昭和五十六年二月）に、「赤い実」以外の「しろばんば」後編は新潮社版『井上靖全集』第十三巻（平成八年五月）に拠った。

（たかぎ・のぶゆき　別府大学教授）